

見習士官余聞

私達は人命のままに戦い、人命のままに戈をおさめた。戦死をすることだけは免れたが、先き行きは不明であった。上級司令部からの指示もなく、ソ連軍も何も言わず、しばらくは空白の日々を生きていた。思いもよらず、その後二年近くソ連に抑留されることになるのであるが、敗戦の時点では、そのようなことを予想した者は誰一人いなかった。しかし、敗戦に続くこれらの一連の出来事は、考えて見れば得難い体験であった。

学校では医学を、軍隊では管理者というか指揮者としてのあり方を、ソ連抑留時には、人間と人生を学んだ。この時代のどの一時期を切り取っても、私は昨日のことのように鮮やかに描写し得る自信がある。

例えば――

見習士官である。これは少尉の一階級手前の位であるが、誰でも、何時でも、何処でも実に

張り切っていて、いふなれば陸軍の華であつた。私達も一ヶ月見習士官をしたが、この時統率の仕方を習つた。人心を収攬するには、言語明快、態度厳正、率先垂範、容姿端麗でなければならない。

見習士官が容姿端麗であつたのは、軍服の一装を着用していたからである。一装というのは誰も手を通していない仕立ておろしの新品をいう。仕立ておろしを着れば、馬子にも衣装でスツキリと見えるのは当然である。

ところが、私達は二装用位のを着せられていて、サツパリ風采があがらなかつた。少なくとも、兵隊が仰いで富嶽の重きを感じさせるような見習士官の姿ではなかつた。これは一にかかつて、陸軍省の怠慢にある。

私達の軍医学校の第S区隊は群馬県高崎市の歩兵第十五連隊補充隊に昭和十九年十月十日より派遣され、歩兵としての訓練をうけていた。階級は衛生軍曹である。H少尉という教官から鍛えられたが、彼は連隊内では行軍の神様といわれていた。

演習も行軍が主体で、軽機関銃を持たされた時は、身体の弱い私は、ズシリと肩に食い込む重さに、皆と歩調を合わせるのが精一杯であつた。左の胸ポケットに歩兵操典を入れて二十四キロの行軍をした時には、襦袢と上衣を通して沁み出た汗に二センチの厚さの操典が全頁濡れていたことがあつた。

しかし、軍隊には何故神様が多いのであろうか。作戦の神様、射撃の神様、銃剣術の神様など。私は時々、日本が敗けたのは、このように神様が多すぎて、神様同志が喧嘩して、足を引っぱりあったためではないかと思うことすらある。

行軍の神様といっても、将校だから軍刀を吊っているだけである。靴は軽い将校靴である。背囊を背負い、銃を担いでいる兵隊より動作が軽快なのはいうも愚かなりで、これで遅ければ身体がどこか悪いとしかいいようがない。

その頃、私達の隣の部屋に大分老齡の衛生部見習士官がいた。

ある日、敬意を表し、同僚二名と訪れた。そこはお互い医者ですぐ打ちとけたが、ちょっと変っているのである。

「最近アメリカのB29爆撃機が一機やって来たでしょう。あの時、新聞では遁走したなどと書いていたけれど、とんでもないことですよ。あれは超高空から赤外線写真でこの近くの太田飛行機工場や、東京付近を撮影して帰ったんで、きっとその内に大空襲がありますよ」と予言したが、結果はご存じの通りである。

彼は医者でありながら、フィルム会社に勤務して、赤外線写真のことばかり研究しており、

アメリカがその点で遙かに進んでいるといい、自分も初めは大根の汁なども使ったといつて、赤外線フィルム之感度増強のためにした苦勞話をし、日本の軍隊が如何に科学を輕視しているかを論難した。

「敬礼」と叫んで金切り声を張りあげる連隊正門の衛兵所は、赤外線警報器に切り替えたらよいとか、多数の兵の勞役を必要とする汲み取り式便所は、水洗式に改良し、兵隊は訓練の方はその全力をそそいだらよいとか、斬新な意見をのべた。

机上には、典範令の代りに、写真に関する原書が沢山ならんでいた。また、赤外線フィルムで皮膚の撮影をすると、肉眼で見えない病変が見付かつて、診断の助けになるのであるが、学会で誰も追試してくれないとこぼしていた。私の科学する心は大分この見習士官によつて開眼させられた。

科学する心と縁遠かつたのがS区隊長である。もちろん医者である。某大出身者であつた。野外での幕舎訓練の時であつた。小使用の溝を掘らされた。長さ二メートル、幅四十センチ、深さ三十センチ位の溝である。彼は長さ幅と高さから容積を計算し、大人は一人一日に千から千五百ミリリットルの尿を排出するから、これは何人分の使用に耐えると計算し、その数字を示した。

私達は彼の計算の早さとその間然する所のない合理的数字に大いに感心したのであるが、驚きはそこまでであつた。

彼の指示にしたがい、並んで小便をしてみると、アレヤ不思議、小便は土に吸い取られて見る見る消えてなくなつて行くではないか。

その時のS区隊長の顔は見ものであつた。

顔で笑つて、心で泣いてというが、あれは顔も心も泣いていた。

彼は数学を知つていたが、物理学を忘れていたのである。

十和田湖の近くに住んでいたので土は水を吸わないと思つていたのであろうか。それとも良家の生まれで、立ち小便をしたことがなかったのであろうか。

とにかく、この事は、私達に自分で実験して結果が判るまでは、断定的に結論にまでは、思考を飛躍させるべきではないということを、実証してみせたという意味では、また科学する心を教えてくれた。

私達は十一月十日に見習士官になり、東京に帰つて、再び、軍医学校で一ヶ月間訓練をうけ、中尉に任官することになつていた。

ところが見習士官を命ずるという陸軍省の通達がなかなか来ない。来たら、私達は新品の第一装の冬服に着替え、持参している軍刀を佩用してよいのであるが、軍曹では銃剣しか腰に下

げられない。だが銃剣は十五連隊の兵器であるから貸せないというわけである。連隊も困ったであろうが、私達も困った。軍人は戸外を軍刀又は銃剣を着用せずに歩くことは出来ないからである。

そうしたら、機転の効く兵器係がいて妙案を考え出した。軍曹のまま、軍刀を手にとって帰京したらいいのではないだろうかというのである。軍刀を腰につるすと服装違反になるが、手に持っている限り違反にはならない。それなら憲兵も文句はいわないだろうという推論である。「法あれば逃路あり」という格言があるが、まさしく法の盲点をついた指摘であった。

私達は十一月十三日頃そのようにして無事東京までの道中を過ごした。

軍医学校に帰ったら、同僚の服装が様々である。立派なラシャ製の冬服を着て、曹長の襟章をつけ、見習士官になっており、新式の士官候補生の金色の徽章を着ている区隊もあれば、銃剣を持って来た区隊もあるという体たらくで、各区隊が派遣されていた連隊の兵器係や経理部の頭の柔軟硬化の程度をよくあらわしていた。

困ったのは、同期の者だと分かっている見習士官の階級章を着けている者には敬礼しなければならぬことであつた。癪である。しかしこれは、軍隊の建制上やむを得ない。私達は軍服を着た人間の中身ではなく、階級章に敬礼するように仕込まれていたからだ。

彼等見習士官は、その内、間違いと分かり襟章を取り替えて、私達と同じ軍曹の階級に戻り、

また、ヤアヤアという間柄になった。しかし不思議である。何故、彼等は見習士官の服装をして私達に答礼した際は一人前に上官の顔をしていたのであろうか。

所詮、人間は永遠に二重人格でしかないというのが、その時の私の感慨であった。

十五連隊では、私達は第一装の冬服が貰えないばかりか、演習のために汗で汚れた現在の軍服のまま東京へ帰れといわれた。

私達は本当に怒った。

こんな汚れた軍服で見習士官になれるか、というのである。それで十人位で被服係の軍曹の所に綺麗な軍服と換えてくれるように頼みに行つた。彼は陸軍省から指令がないから駄目だといつてどうしても換えてくれない。

同じ軍曹でも私達軍医候補生の軍曹より彼の方が先任にあたるので、殴ったり、脅かしたりすることは出来ない。

議論の最中に、支那事変で足を負傷したという少尉の週番士官が通りかかった。私達の話を知っていたが、「その服装のままで見習士官になるとはいかにも気の毒だ。特に汚れた者の分だけでも軍服を取り換えてやれ」といつてくれた。

そこがどうか、ここがどうか、とにかく軍隊なのである。上官の命令は即ち朕の命令で

あるから、軍曹は少しブツクサいつていたが、私達二、三人の上衣を受け取ると二階へ上がり、しばらくして帰つて来て、それぞれに上衣を渡してくれた。

私が着てみると、生暖かいのである。誰かの着用しているのを取りあげて持つて来たのである。今思い出しても「兵は拙速を尚ぶ^{たつと}」という言葉の見本みたいな行動であつた。

新任の某軍医中尉は、営内で朝、起床後、面洗器をもたずに洗面所に行つたところ、そこで顔を洗つていた見知らぬ軍曹が彼に気がつきパツと敬礼し、中尉の手に面洗器がないのを見てとると、自分の隣で顔を洗つていた兵隊の横ヅラを物も言わずに張り飛ばし、その兵隊の面洗器をひつたり、中の水をザーツと棄てて、「ハイ、軍医殿、これを使って下さい」といつて差し出されたことがあるという。その間、一瞬で、神業みたいだつたそう。

昭和二十年頃、少佐になつていたその中尉の自宅を私が訪れた時、愛嬌のよい奥さんがコロコロと笑いながらしてくれた話である。奥さんに話して聞かす位だから、余程、印象に残つた面白い出来事であつたに違いない。私も面白い。面白くないのは殴られた兵隊だけであろう。

軍曹は何故自分の面洗器を渡すことに思い到らなかつたのか。または、あのような光景に数多く接していて、一連の所作が間髪をいれず行なえるようになっていたのであるうか。もし条件反射的に、殴る、面洗器を取りあげる、水を棄てる、上官に差し出すというこまごまとした

動作が、例えば、据銃訓練や、銃剣術の刺突訓練の動作のように完成されていたとすれば、戦争のプロと自他共に認め、認められていた日本の下士官はこういう点でも世界一優秀であったといえる。

以上書いて来たことは盗みではないが、盗みとなると、軍隊には山ほどある。

ハイラルで会ったある年老いた衛生部見習士官は、右翼団体の一員で、故郷にいる時は、警察の特高課の署員が転勤交代の際には挨拶がわりに動静をうかがいに来たというくらい、神がかっており、三十五歳以後は妻と同衾もなかったというほど、潔癖で（右翼であるという点と、妻と同衾しないこととの間に、どんな関係があるのか今もって私には分からない）軍隊には軍医予備員で勇躍大君の辺にこそ死なめで入って来たのであるが、何かを紛失した時、上官から「何処かで盗って来い」といわれ、

「軍隊では泥棒をして来いというんですからなあ。私は幻滅を感じましたよ。お粗末ですなあ」全くゲツソリしたという表情で話してくれた。

戦後、彼の故郷の近くまで行った時、電話をしたら、「軍隊のことですか。みんな忘れてしまっていますなあ。私も年をとったもんですから」という返事で、右翼の片鱗も言葉の端々からう

かがいえなかった。あれは敗戦呆けではなくて、盗みを強制させられた時の、夢と現実との違いに愕然としたための落差呆けがそのままつづいているのだと思った。

東海林太郎名曲集の枕言葉にいう。

へ 夢のある日は楽しいものよ。

どうか醒めずに そのままに。

彼は醒め切ってしまっていたのである。

某軍曹はバイアス湾に敵前上陸をした砲兵である。彼の話ではある夜、数頭の馬が、放馬、早くいえば、逃げていなくなったのだそうである。砲兵は馬がいなくては太砲が牽つぱれず戦争が出来ない。やむなく、夜、闇にまぎれて、隣の輜重隊の馬を盗んだというから、部隊になると盗みも派手で大型になる。

見つからないように、夜の明けない暗い内に出発したのは言うまでもない。昼頃、山の頂上で休息していると、輜重隊の兵隊が、盗まれた馬の駄載分の荷物を各人が分担して担ぎ、汗まみれになって山を喘ぎ喘ぎ登って来るのが見えたという。

「気の毒を画に描いたような情景でした」

軍曹は、いまなお、同情を禁じ得ぬ口吻であつた。

これはソ連でジャガ芋を掘っている時に聞いたのであるが、私は果てしなくつづく青いシリヤの空を、中支のバイアス湾の空におきかえてみて、峨々たる山顛に登り続ける兵の一群を頭に描いた。私も軍人のハシクレである。空想することは不可能ではなかった。

そして軍曹の話は、実践を経て来た人間でないと言えない話だなあと思った。

某軍医候補生（階級は軍曹）は同僚が巻脚胖を盗られたといってきたので、何処からか盗つて来いよとけしかけたところ、夜十時頃、その同僚が、

「よその内務班に行つて盗つて来たぞ」と囁ささやいたので、

「盗られた兵隊はどんなにしていた」と尋ねたら、

「寝台に横になつてはいたが、目は開けていた」と答えたので、

「バカ。そりゃ、お前、起きていたんだ。早く返して来い」

と注意したと、まるで落語を地でゆくような話をしてくれたが、恐らく、兵隊は軍曹が巻脚胖を盗りに来たり、返しに来た時には、肝も潰れる思いをして、生きた心地もしなかったこと

は想像にかたくない。

ハイラルで私達は他の兵科の部隊と同じ兵舎を使っていたことがあったが、その部隊が他地区に移動した際、私の隊の馬の鞍が一個紛失した。「部隊と共に去りぬ」といえるくらい、上手に盗まれた。幸い、私の所の主計中尉が、依然兵器廠に勤務していた誼^{よしみ}で、廃品の鞍を買って来て、員数をつけ事無きを得たが、人、とりわけ部隊が移動する時には要注意である。

次のは盗みではなく紛失にまつわる話である。某軍医中尉は、見習士官の頃、乗馬演習中、鎧^{あぶみ}の金具をなくし、市販の物で間に合わせていたら、教官の見習士官に発見され、「貴様、官給品を紛失してけしからん」といわれ頬を殴られた。

兵科の見習士官は一年位で少尉に任官するが、軍医候補生などの衛生部見習士官は一ヶ月で大学卒は中尉に任官する。物凄く進級が早い。何度も書くようであるが、軍曹を一ヶ月、見習士官を一ヶ月しかない。

ある連隊では、私達が学生服姿で入隊して来るのを見た六年兵の伍長が、「学生の奴、鍛えてやるからな」と張り切ったのはよいが、学生が軍服に着替えたのをみると軍曹なので、ビックリ仰天して、「俺は軍隊やゝめた」といったという逸話がある位である。

さて、先刻の鎧の金具をなくした見習士官は程なく中尉になった。早速、乗馬演習をした部

隊に出掛けて行き、件の見習士官を呼び出し、棍棒で三ツばかり殴って、彼の言葉通りに書く、クラワシて鬱憤を晴らしたというから、聞いただけでも胸がスーツとする。殴られたら殴り返す、盗られたら盗り返す、これが軍隊である。

あらゆる有形、無形の各種戦斗要素を綜合して敵に優る威力を要点に集中發揮せしめて、速やかに戦捷を獲得するのが軍隊の目的である以上、殴られっぱなしということは軍人の本義に悖る。無形の戦斗要素すなわち精神力、気魄に欠けることになるからである。

強く、逞しく生きて行くのが人生ならば、（少し浪花節調だが）勝たねばならぬ宿命を背負つた軍人は、更に更に、より強く、より逞しくあらねばならぬと思うのだが如何。いかなる国の作戦要務令にも、敵が攻めて来たら逃げまじうとは書いてない筈である。